

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



#### 第4回

#### 「奥方様」



先生様が医師としてクラムシーに入植したのは1808年10月のある日のことでした。実際には、準備期間もあったでしょうからもう少し早い月日でしょうね。いかんせん、残っている書類からしか判断できません。先生様27歳の時です。学位を得たのが24歳の時ですから、クラムシーで開業するのに3年間かかっています。この

間先生様は何をしていたのか、記録が残されておりませんので、あれこれ邪推も含めて想像するわけですが、フローベルの名作『ボヴァリー夫人』からちょっと知恵をいただいて、クラムシーで医師を引退したいとかねてから願っていた老医学博士から、彼の地盤・看板、つまり医業を営むに必要な患者や施設・設備などを金銭で買い取る、そのことで奔走した3年だったのだろうということです。ぼくのこの邪推を成り立たせるのに、幸いあれ、セガンの誕生の立会人の一人にガブリエ・ピエール・サレさんという67歳の老医学博士がいます。次の写真はサレ医師の診療所跡。



冒頭の図版は『フランス人の自画像』という本の「田舎の医師」という項目に添えられた19世紀の地方医師像。馬を操る鞭を手にしていますね。先生様もきっとこんな風だったろうと思います。

さて、先生様が医業を開いて3年半経った1811年4月29日夜8時、一組の男女がヨンヌ県オセールの

オテル・ド・ヴィル(役所)の戸籍係を訪れたのです。夜の8時ですって?! 役所が開いてるんですか?と思わず声を挙げてしまいますね。右写真はオテル・ド・ヴィルの戸籍部門です。男はジャック＝オネジム・セガンと名乗り、女はマルグリット・ユザンヌと名乗りました。すでにこの一組の男女は、結婚をするので公示をしてほしい、役所の手で結婚式を執り行ってほしい旨を申し出ていたのです。戸籍係へのこの夜討ちは書類上の結婚式の執行のため。フランス革命以前は教会の手で行われていたことを、革命後は役人の手で式が執行されるようになっていました。我が国の現在は2人の保証人の署名を添えた婚姻届を提出し受理されればそれで公式の婚姻が成立しますが、フランス社会は、現在でも、立会人が入った婚姻の宣誓儀式が役人の手によって行われます。

ちょっと二人の結婚証明書を覗いてみましょう。お役所文書ですから、ややこしい。なるべく分かるように訳出します。

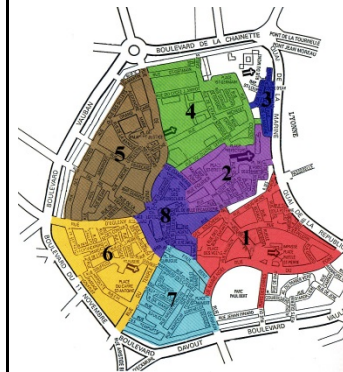
「1811年4月29日夜8時、我々助役、戸籍係のところに、クーランジュ・シュール・ヨンヌで共和暦6年プレリアル23日に死去したフランソワ・セガン氏とクーランジュ・シュール・ヨンヌで同9年メシドール19日に死去したマリ・テレ



ーズ・ギマルの息子ジャック＝オネジム・セガン氏、30歳、クラムシーの医師、と、故ジョセフ・ユザンヌと娘の結婚に同意したマリ・アニエス・ペロニエとの娘マルグリット・ユザンヌ嬢、17歳、オセール居住、とが出頭した。すでに、我々は、(中略)二人の結婚式を執り行い役所の正面玄関に結婚公示を為すよう要請されていた。(中略)この結婚の妨げになるものは何もない故、我々は、結婚にかかわる書類のすべてと民法典第6条を読会したのち、彼らの求めに直ちに応え、我々が式を執り行い公示を為すしだいである。(後略)」

先生様は奥方様を娶るために、当時のフランス社会の慣習に従い、42000フランをユザンヌ家に支度金を支払ったといっています。今日の日本円に換算するとおよそ4000万円に上りましょうか。たった一人のクラムシーのセガン家がそれだけの支払い能力を持っていたわけですから、やはりたいしたお金持ちだったのですね。

こうして、マルグリット・ユザンヌ嬢はセガン家の女主、すなわち奥方様となったわけですが、1793年9月15日に、オセールで、ユザンヌ家の4人きょうだいの末娘として生まれております。ユザンヌ家も、セガン家と同じように、入植者でした。とは言っても、マルグリットさんの祖父ジョゼフ・ムーリス・ユザンヌがオセールに入植した第一代です。オセールのデュ・ボン通りを届出住所としています、番地



は分かりません。オセールの街区ごとに区切った地図がありますので、それをお目に掛けましょうか。左の色分け地図がそれで、赤1の部分にデュ・ボン通りが含まれます。この街区(小教区)教会はサン＝ピエール教会でしたので、この赤

い地域をサン＝ピエール街と言っています。

祖父の上の代、つまりマルグリットさんの曾祖父家族が、サルデーニア王国領サヴォア地方からフランス王国に亡命したイタリア人移民家族であり、その子どものジョセフ・ムーリス家族がオセールに入植した、というわけです。サヴォアではどのような身分だったのでしょうか、分かっていません。祖父の代で生糸商人として成功し、オセールではなかなかの商売人であったようです。大革命前から大商人が政治の表舞台に立っていましたが、ユザンヌ家は、そうした地位に就くほどにまで社会的な地位を獲得していたのでしょうか。そのあたりは十分に調べが行き届いておりませんが、ユザンヌ家同族で、マルグリットのいとこにあたる、1803年生まれのジュール・アントワヌ・ユザンヌは、1839年にはオセール・コミューン議員を、1848年9月から49年8月の1年間、オセールのコミューン長(俗に言う市長)を務めています。

ユザンヌ家の社会的地位の上昇について少し紹介しましたが、居住地区についても、じつは、街の中心に上っていく

のです。街の中心は先ほどのオセール地図で黒く彩られた8の街区オテル・ド・ヴィル街区ですが、前近代時代の商工業の中心地でもあります。左の写真はその中心地の象徴である職人・商人のブティック、つまり生産から販売までを展示する建物の入り口です。現在はアパートに転用されていますが、一部は昔の名残のブティックが残

され、経営されています。そして、このごく近在の住所で奥方様のお母さまが最期の時を迎えられ、その真向かいのお宅が後年コミューン長になったいとこの家なのです。

じつは、奥方様については、まったくといていいほど、情報が残されていません。セガン家で行われた晩餐会でピアノを奏でていたと、例の記録魔によって書き残されているの



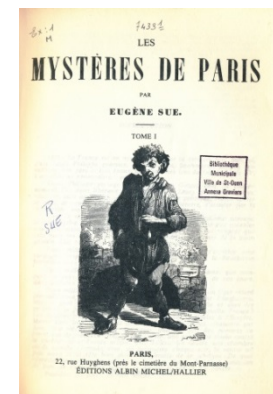
が唯一の情報と言え情報でしょうか。左図版は19世紀のブルジョア家庭の一画面を描いたものです。お嬢さんがピアノのレッスンを受けているところ。お嬢さんが先生の所に「お稽古に行く」のではなくて、先生がお嬢様のお宅(に住み込ん)でピアノを教える、というのが常態です。この人たちも家庭教師なのですね、音楽に特化しておりますが。

話のついでに、奥方様も、幼少年期、時代を反映して乳母によって哺乳され、雇われた教育係によって厳しくしつけられたことでしょう。ユザンヌ家には、時代の常識でいえば、家政婦、女中、教育係、その他に調理人などが雇用されていたはずで、下の図版はお嬢さまが教育係から手ほどきを受けている様を描いたものです。こうして、奥方様は貴婦人の下地を作られたのでしょうか。

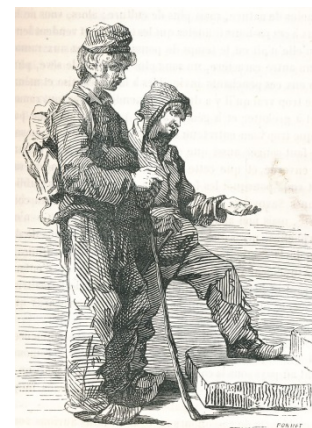


奥方様についても気になりますが、ユザンヌ家が政争に敗れて脱出してきた地サヴォアというのが気になります。政争にどんなことがあったのかは調べが行き届いておりませんのでこれ以上のことは言えませんが、サヴォアと聞けば、多くの貧相な頭に思い浮かぶのは、ジャン・ジャック・ルソー

『エミール』にある「サヴォアの助任司祭の信仰告白」なんかは、『エミール』弾圧の元になっているし、ずっと後年のことですが、代議士となった『パリの秘密』の作者ウージェーヌ・シューがナポレオン3世の圧政から逃れて終の棲み処と定めたのもサヴォアだったのです。右の図版は1851年版の『パリの秘密』第1巻の表紙ですが、この巻には、かのカール・マルクスさんによる批評が載せられています。



文化史的には、サヴォアからはパリの煙突掃除夫として出稼ぎに来る、そういう職能集団の土地であるなど、なかなか興味惹かれるところがあるのです。なぜ、煙突掃除夫か？



ガラが小さいから、といわれています。左の図版は煙突掃除人です。必ず二人一組で作業をします。焚き口に一人が入り、煙突の内にこびりついた煤を掻き落とします。あと一人がその煤を焚き口から掻き出します。

フランスの中世から近代のはじめにかけて、地域ごとの職能集団があったのです。フランス中部ブルゴーニュのモルヴァンが乳母の里、フランス東部サヴォアが煙突掃除夫の里、労働者階級初の国会議員となったマルタン・ナドさんはフランス中部リムーザンの出身ですが、そこは石工の里、という具合に。

しかしユザンヌ家はそうした労働者階級とは無縁の世界の、近代ブルジョアジーの走りの階層のご出身なのです。